様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５４６３４９１

研究課題名（和文）アクションリサーチを用いたＮＩＣＵからの継続的育児支援プログラムの実践と評価

研究課題名（英文）Implementation and evaluation of a continuous support care program for infants in the NICU using action research

研究代表者
廣瀬　幸美（HIROSE, Yukimi）

横浜市立大学・医学部・教授

研究者番号：６０１７５９１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究者らが開発したNICUからの継続育児支援プログラムをもとに、現場の課題について、NICU看護師およびICU看護師との協働によるアクションリサーチによって検討し、プログラム改善のための評価を行った。NICUでは座談会による問題意識の共有および事例提示により、看護師の育児支援に対する意識が変化し、他部署への参画に繋がった。ICUでは経験年数の高い看護師を交えるなど病棟文化に合わせた取組みによって、継続的育児支援に対する意識が高まり、ケアの変化に繋がることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to implement and evaluate the continuous support care program for infants in the NICU which researchers developed using action research with cooperation with NICU nurses and ICU nurses. NICU nurses' recognition for child care support changed by sharing the problem through discussion and showing cases, and they intended to participate in other sections. ICU nurses increased awareness for a continuous support care program for infants through an action to ward culture in which experience-rich nurses participated. It was suggested that nursing care changed through the awareness of these nurses.

研究分野：医歯薬学

キーワード：ＮＩＣＵ　継続看護　育児支援　アクションリサーチ

１．研究開始当初の背景

NICU（新生児集中治療室）入院を要する新生児が増加し、NICU 病床確保が不十分な現状においては、児の状態が安定すれば速やかに転棟・退院となる場合が多く、親へのケアや育児指導が不十分なまま小児病棟に転棟あるいは退院せざるを得ない。小児病棟に転棟する児の親は、環境や処置、病棟看護師に対する不安等があり、転棟直後の継続した支援を求めている(前林ら 2008)。また、母親は転棟とともに子どもの世話を求められることに戸惑い、小児病棟看護師の考える親役割とのギャップの大きさがストレスになっている(西田 2006)。他方、NICU 看護職においても、他科や他職種との連携において意識の違いがあり(工藤ら 2005)、ケアの調整が課題となっている。

そこで、研究代表者らは、NICU からの転棟・退院においても家族がエンパワーメントされるよう継続的に育児支援が得られることが重要と考え、平成 22 年度から科研費基盤研究（C)『NICU からの転棟・退院におけるハイリスク児の継続的育児支援ケアプログラムの開発』に取り組んだ。

これまで、研究代表者らは、NICU 退院児の育児支援における長期的観点から、低出生体重児の保育園生活における養育問題と看護職による支援について明らかにし、さらに、転棟後の継続看護の観点から、NICU と小児病棟との連携について調査し検討を重ねてきた。これらの検討結果を踏まえ、全国の周産期母子医療センター看護管理者を対象に、NICU からの転棟・退院に伴う継続看護における連携の実際と看護職の意識について明らかにすることを目的に調査を実施し（廣瀬ら、2013）、育児支援プログラム案を作成した。これは NICU から小児病棟・ICU・外来・地域の各部署との継続看護の連携の実態を反映しており、具体的で個別のケースに適用可能な実践的プログラムである。このプログラムをスタッフチームとパートナーシップのもとに実践し、アクションリサーチにより実践課題の解決を図ることで、ケアに携わる看護師を支援し、プログラムの評価・改善により看護ケアの質の向上に繋がるのではないかと考えた。

看護におけるアクションリサーチの手法は、臨床現場において、実践的な知識の創出と現場に変化をもたらすことを目的としており（筒井,2010）、その具体的な手法は、既存のプログラムを介入として実施し効果を測定するという従来の研究方法とは異なり、現場の看護師と課題を共有し、その解決への方略を共に考えて実践するというアクションにより現場に変化をもたらす。本研究の実施にあたっては、研究者がフィールドとしている本学附属病院において、関連部署の看護師と協働しアクションリサーチを展開するため、課題解決のプロセスから現場のスタッフの学びを深め、エンパワーする効果も期待できる。

２．研究の目的

本研究は、NICU からの継続的育児支援のための NICU および関連部署における看護ケアの質を高めるためのプログラムを検討することである。

具体的には、研究代表者らが実施した、全国の周産期母子医療センターにおける NICU からの転棟・退院に伴う継続看護の実態調査（廣瀬ら、2013）から得られた継続的育児支援プログラムをもとに、ハイリスク児の継続ケアの困難な現状・課題について、臨床看護師と研究者との協働によるアクションリサーチを用いて現場の課題の改善を図るとともに、プログラム改善のための評価を行うことである。

３．研究の方法

(1) アクションリサーチの計画

フィールドである本学附属病院 NICU と関連部署の現場で生じている課題について、各部署からの情報を得た。その後、研究フィールドの管理者（看護部長）に申し入れ承諾を得ると共に、研究グループ（研究者と研究協力者）として、研究計画書を実践現場とすり合わせたものに修正し、本学の研究倫理審査会にかけ、承認が得られた。

①研究参加者

アクションリサーチ協力者（研究協力者）とリサーチグループメンバーから成る。アクションリサーチ協力者は、研究者と協働してアクションを実施し、アクションリサーチを推進する者で、研究の趣旨を説明し同意が得られた NICU、ICU、小児科病棟、小児科外来の 4 部署に勤務する看護師で、各部署 2 名の合計 8 名である。アクションリサーチ協力者には、アクションをおこし、記録を分析し、実施の中心者となってもらった。リサーチグループメンバーは、アクションリサーチ協力者と共にアクションリサーチに参加するメンバーであり、NICU、ICU、小児科病棟、小児科外来の何れかの部署に勤務する看護師で、研究の趣旨を説明し同意が得られた者とした。

②アクションの内容

・部署別課題の検討：NICU からの継続的な育児支援上の課題について話合った。

・各課題に対する部署別アクションリサーチの実施：アクションリサーチ協力者を中心に、勉強会の企画、計画立案、実施した。

・部署別アクションの結果について、アクションリサーチ協力者と研究者とで、定期的に（ほぼ１か月に１回のペースで）分析を実施した。

(2)アクションリサーチの展開

平成 26 年には研究グループとして、研究計画書を実践現場とすり合わせたものに修正し、平成 27 年 3 月より、NICU・ICU・小児

病棟の 3 部署ごとにアクションを展開した。計画当初に予定した小児科外来は、アクションリサーチ協力者として承諾した看護師の部署移動により、研究フィールドから外れ、上記の 3 部署となった。

①研究参加者

平成 27 年 7 月に研究推進者の部署移動でメンバーが一部入れ替わり、また 10 月には小児病棟でのアクションリサーチの継続が困難となり、11 月以降は NICU と ICU の 2 部署での実施となった。リサーチグループメンバーとして、NICU に勤務する看護師 20 名、ICU で勤務する看護師 12 名より研究の同意が得られた。

②グループ活動

平成 26 年度の検討により修正された、NICU からの転棟・退院に伴う継続的育児支援プログラムをメンバー間で共有するために、各部署のアクションリサーチ協力者がそれぞれの部署において、座談会や病棟カンファレンスを実施した。同時に、事例検討や継続的な育児支援に関する看護師の考えを自由記述やインタビューより取集した。平成 27 年 3 月より、研究者と各部署のアクションリサーチ協力者によるアクションリサーチ会議を定期的に実施し、平成 28 年 2 月までに 10 回開催した。

③データ収集および分析方法

各部署のアクションリサーチ協力者がグループ活動の参加観察、インタビュー・カンファレンス等の意見交換について逐語禄を作成した。アクションリサーチ協力者と研究者全員で、その逐語禄から継続的育児支援に関するデータを抽出・分析し、結果をまとめた。

４．研究成果

NICU および ICU におけるアクションの結果は以下の通りである。

(1)NICU におけるアクションリサーチ

NICU においては、部署間連携について看護師の意識に違いがあり、育児支援が継続的な退院支援に繋がるかが課題となっている。そこで、NICU からの転棟・退院においても家族がエンパワーメントされるように継続的に支援が得られることが重要と考え、臨床看護師と研究者との共同によるアクションリサーチを用いて現場の課題の改善を図ることが、看護ケアの質の向上に繋がるのではないかと考えた。育児支援について共に考え検討するというアクションによって、看護師の意識やケアに起こる変化を明らかにすることに取組んだ。アクションへの導入として、NICU に入室し母子分離を体験している乳幼児期のきょうだい児への看護実践の現状について情報提供を行った。

・NICU のアクションリサーチ協力者を中心に看護師 20 名（リサーチグループメンバー）で育児支援について座談会を行い、現状と課題を把握し今後の方向性を検討した。座談会は支援について語り合い今後の方向性を検討する場とし、事前にメンバーに開催を提示し、自由参加とした。

・参加観察より得られたデータを逐語録化し、継続的育児支援に対する意識、支援内容に関するデータを抽出し分析した。

・その結果、

①課題の抽出：育児支援の評価困難、看護師個々の経験差、部署連携の難しさ、関連部署との共通ツールがなく部署間連携が取りにくいことが明らかとなった。

②パンフレット内容の検討：NICU には NICU の経験しかない看護師が多く、退院後の生活がイメージできない、家族への情報提供の範囲がわからないという意見が出された。特に、経験の浅い参加者からはパンフレットを用いても育児支援を行う自信がないという意見があり、2 回の座談会を踏まえ、パンフレット作成以前に退院後の生活をイメージできるようにする必要があると考え、事例を示し検討することになった。

③事例提示：小児科外来での臨床経験のある看護師による、NICU を退院した子どもと家族の様子についての事例を通して、メンバーは入院中の支援内容が退院後の生活に影響していることを知った。同時に、メンバーより関連部署からの情報提供を求める意見があがった。

④育児支援の評価方法の検討：週 1 回行われるカンファレンスで外来看護師に退院後の様子についての情報提供を依頼する、外来看護に携わり受診時の子どもと家族の様子から評価する、ハイリスクな子どもと家族に関する小児科・産科・精神科外来間で行っているカンファレンスに参加するという意見があった。メンバーは、これらの意見には積極的に同意するものの、実際に組織を超えて計画することや具体的に行動を起こすとはなく、「状況が整えば」「機会があれば」という受身的な姿勢が感じられた。

⑤管理者へのアクション：アクションリサーチ協力者は、メンバーにやる気はあるものの、組織を超えた働きかけがわからず、対応の難しさを感じていた。そのためこれ以上の進展は望めないと感じ、病棟管理者を巻き込んで次の段階を見出すことを考え、師長にこれまでの経過を話した。以前から問題意識を持ち、育児支援の評価を行いたいと考えている看護師の情報を受け、アクションリサーチ協力者と管理者と協同で、小児科外来への参画について計画・調整に踏み切ることになった。

・まとめ

メンバーの育児支援に対する意識が変化したきっかけは、支援が個々によって異なる、伝承が多い、ケアの振り返りが出来ないといった現状が座談会で言語化され、問題意識が共有されたことにある。更に事例提示を通し、入院中の育児支援が退院後の育児に影響すると気づいたことが、支援内容の評価と退院後の家族と子どもの生活を知るための外来

参画という意識の変化に繋がったと考えられる。

(2) ICUにおけるアクションリサーチ
NICU に入院を要する新生児のうち手術が必要となる循環器疾患の子どもは、術後管理のために殆どがICUに入室する。そのような子どもへの看護の場は、NICU、ICU、小児病棟、外来と多岐に渡り、医療者の子どもや家族への対応の違いに親が戸惑うという声が上がっていた。そこで治療中心の場であるICUでもNICUからの継続的な育児支援がなされるよう、ケアのあり方を再検討することが必要であると考えた。ICU においては、NICUからの継続的な育児支援を実施するため、支援について共に考え検討するというアクションによって、ICU で実現可能な方法を見出すことを目的とした。
・ICU のアクションリサーチ協力者が看護師12 名（リサーチグループメンバー）に、ICUでの継続的な育児支援を説明した後、①ICUでの継続的育児支援に関する看護師の考えを自由記載・インタビューで収集し、②経験年数別の意見交換を実施した。さらに③「ICUに入室経験のある患児の家族の思いやICU看護師に対する声」に関する事例を提示し、「要望メモ」の提案と検討後、④「メッセージカード」の作成というアクションを実施した。
・データ分析方法は、インタビュー・病棟カンファレンス等の意見交換について逐語録を作成した。その逐語録と自由記載用紙から、ICU における育児支援への意識・ケアの介入方法とスタッフの考え方に関するデータを抽出し、実現可能な方法を見出した。
・その結果、
①経験年数別のディスカッション
アクションリサーチ協力者は、メンバーからの継続的育児支援に対する消極的な意見について、ICU の特性上、治療優先の場という意識が根強く、看護師間で育児支援について考える機会が少ない現状にあり、意見が出し難いと考え、看護経験年数別に意見を募った。その結果、経験3年目の看護師から「家族との関わりで困っている」との経験が語られた。一方、経験年数の高い看護師からは、自身の家族の入院経験から「声掛けしない看護師は、患者を看てくれていないように感じた」との体験が語られ「術前の家族の心理状態を考えて、親からICUへ要望を伝えるメモを渡してもらうのはどうか」との発案があった。これらから、看護師それぞれに「家族と関わりたい」との思いがあることや、経験年数の高い看護師の提案から取組みの糸口が見えた。そこで、次のアクションとして、病棟カンファレンスで事例を提示し、看護実践上の思いや問題を共有したうえで「要望メモ」を提案することにした。
②事例の提示と「要望メモ」の提案
ICUの患児の転棟先であるNICU看護師（メンバー）より事例を提示してもらい、「ICU に入室経験のある子どもの家族の思いやICU看護師に対する声」について病棟カンファレンスで共有し、「要望メモ」案を提示した。この時、ICU 看護師より「要望メモは、家族が強制的に感じてしまうので、家族が伝えたいことをメモにして渡してもらう方法はどうか」という意見があった。これを基に家族の育児に対する思いをICU看護師に伝える「メッセージカード」へと発想を転換し、病棟カンファレンスで提示することにした。
③「メッセージカード」への取組み
「メッセージカード」を病棟カンファレンスで提案した結果、看護師の反応はこれまでと異なり、反論や否定的な意見がみられなかった。メッセージカードは、家族の育児に対する思いを看護師に伝えるだけでなく、看護師が家族とともに子どもの回復を願う看護につなげる媒体になるとも考えた。そのため、有志でメッセージカードの作成や提示方法等の具体案を検討するまでに至った。このような検討を通して、3 年目看護師が積極的に家族と関わる場面もみられ、看護師間で育児支援に向けた話題が増えるという副次的効果もみられはじめた。
・まとめ
ICU で育児支援に消極的であったメンバーをメッセージカードの作成に至らせたのは、経験年数の高い看護師を交えて事例を元に看護を振り返ったことが、看護師の意識に影響を与え、変化に至ったと考えられる。このようなICU看護師の文化に合わせた取組みによって、継続的な育児支援に対する意識が高まり、ケアの変化に繋がるのではないかと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①笹尾由佳理、<u>佐藤朝美</u>、<u>廣瀬幸美</u>：母子分離を体験している NICU 入院児の乳幼児期のきょうだい児への看護支援、日本小児看護学会誌、査読有、26 巻、2017、印刷中

〔学会発表〕（計４件）
①中村千春、長谷川真央、<u>廣瀬幸美</u>、<u>佐藤朝美</u>、田中涼子、鈴木友美：NICUからの継続的な育児支援に対するICU看護師の意識とケアの変化、日本小児看護学会第 26 回学術集会、別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ（大分県・別府市）、2016 年 7 月 23 日

②田中涼子、鈴木友美、中村千春、長谷川真央、<u>佐藤朝美</u>、<u>廣瀬幸美</u>：アクションリサーチを用いた NICU における継続的な育児支援に対する看護師の意識とケアの変化、日本小児看護学会第 26 回学術集会、別府国際コンベンションセンタービーコンプ

ラザ（大分県・別府市）、2016 年 7 月 23 日

③笹尾由佳理、佐藤朝美、廣瀬幸美：同胞が NICU に入室し母子分離を体験している乳幼児期のきょうだい児への看護師の支援、日本小児看護学会第 25 回学術集会、東京ベイ幕張ホール（千葉県・千葉市）、2015 年 7 月 25 日

④廣瀬幸美、永田真弓：NICU からの転棟・退院に伴う継続看護における連携の実際と NICU 看護師の意識に関する調査、第 23 回日本新生児看護学会学術集会、石川県立音楽堂（石川県・金沢市）、2013 年 12 月 2 日

６．研究組織

(1)研究代表者

廣瀬　幸美（HIROSE, Yukimi）
横浜市立大学・医学部・教授
研究者番号：60175916

(2)研究分担者

永田　真弓（NAGATA, Mayumi）
関東学院大学・看護学部・教授
研究者番号：40294558

佐藤 朝美（SATO, Tomomi）
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：50384889

杉村 篤士（SUGIMURA, Atsushi）
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号：20708606

永吉 美智枝（NAGAYPSHI, Michie）
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号：30730113

(3)研究協力者

田中 涼子（TANAKA, Ryoko）
横浜市立大学・附属病院・看護師

鈴木 友美（SUZUKI, Tomomi）
横浜市立大学・附属病院・看護師

佐々木智世（SASAKI, Tomoyo）
横浜市立大学・附属病院・看護師

中村 千春（NAKAMURA, Chiharu）
横浜市立大学・附属病院・看護師

長谷川真央（HASEGAWA, Mao）
横浜市立大学・附属病院・看護師

笹尾由佳理（SASAO, Yukari）
横浜市立大学・附属市民総合医療センター・看護師